

氏名	高 崎 元 宏
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第3162号
学位授与の日付	平成9年12月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	ブリリアントブルー法色素内視鏡検査を用いた胃粘膜萎縮 の評価
論文審査委員	教授 辻 孝夫 教授 榎野 博史 教授 赤木 忠厚

学位論文内容の要旨

1991年から1992年までに、ブリリアントブルー法（BB法）による色素内視鏡検査を施行した連続728症例（男性342例、女性386例）を対象として胃粘膜状態の診断所見について検討を行なった。まずBB法による色素内視鏡検査を施行し、腸上皮化生をI-0、I-1、I-2、I-3、粘膜萎縮をA-0、A-1、A-2、A-3のそれぞれ4段階に分類し、IとAの和であるIA値（IA）を求めた。さらに、木村・竹本の分類に従って腺境界をC-1、C-2、C-3、O-1、O-2、O-3の6段階で分類した。同時に、血清ペプシノゲン（PG）IおよびPG IIを測定し、血清PG I / PG II比を算出した。IAはPG I / II比および腺境界と高い相関を示し、PG I / II比はIAが大きくなるほど低値を示した。PG I / II比は、IA-0群では、年代の上昇にかかわらずほぼ一定値を示し、IA \geq 1群では、年代の上昇とともに低値を示した。また各年代におけるPG I / II比は、IA-0群に比してIA \geq 1群が有意に低値を示した。以上の結果、BB法色素内視鏡検査によって得られるIAを用いた胃粘膜の評価法は、萎縮の程度をよく反映し、さらにPG I / II比の測定に基づく"serologic biopsy"の成績とよく一致することが明らかとなった。本法は、スクリーニングとして施行可能であり、低侵襲でかつ有意義な胃粘膜の評価法となりうるものと思われた。

論文審査結果の要旨

本研究は、ブリリアントブルー法（BB法）色素内視鏡検査を、BBを倍量にし、同時に1%メチレンブルー（MB）水溶液を用いる二重着色に改変して行った方法を728例の患者に施行し、胃粘膜状態を研究したものであり、その結果、低侵襲かつ短時間で、粘膜萎縮や腸上皮化生など貴重な結果を得ており、興味ある成績と考えられる。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。